

七助は幼い頃から蟻一匹踏み潰すことも触ることもできないほど、臆病な上に心優しい少年だった。親は和菓子屋を営んでいたので、時折菓子を小包に入れて携えてくる。二人で菓子を食べるのは決まって町のはずれにある、川のほとりだった。鬱蒼とした木々の間の、木漏れ日が地べたに這う道を駆け回り、川原で座って談笑し、菓子を二人で食べたりにして、日々の飽いた時間を過ごした。日が傾いて頬が茜色に染まる時間帯になると、泥だらけになって家に帰った。七助は潔癖症と言えるほどの綺麗好きだったので、入念に泥を払いながら帰路を歩いた。

七助の持つてくる菓子は様々だったが、とりわけ水羊羹を好んで持つてきた。粉がついていないから、手が汚れないし、食べやすく美味いんだ、と俺に言った。俺は水羊羹が嫌いだっただ(言ってしまうえば、汚れるものを好んでいたのかもしれない)。その点においては、七助と全く正反対の気質を持つていたとも言える。それでもぶつかり合うことなく、円滑に関係を進めて行けたのは、奇跡に近いものがあるだろう。水羊羹が嫌いだ、と俺が言うと、七助が弁解することを知っていたので、いつもそのようなやり口で彼を弄んだ。だが和菓子を作ってくれた七助の親の気持ちを慮って、菓子を残す事は一度もしなかった。

二人の話の種になるのはなんて事のない、学校のことだった。今思い返してみると、二人とも意図的に戦争の話題を避けていたような気もする。人生の潮目を身近に感じられる時、つまり今まさに戦場へ引き摺り込まれてもおかしくない年頃まで、俺と七助は至ってしまった。

繰り返すようではあるが、七助は穢れたものを嫌っていた。しかしそれはただ汚れているものが嫌いなのではなく、下劣なものを嫌っていたのであった。煙草を吸う少年や、理由もなく同級生をいびる教師、それらに口出しをしない彼自身を嫌っていた。

そんな七助にとって戦争とは穢れたものであり、目を背ける対象としてみなされていた。七助はその態度を数年間、頑なに続けていた。だが近年、その態度にも隙が生じつつある。七助の向かいの家に住んでいた青年の遺骨が戻ってきた時の七助の、動揺が隠せていなかった姿を覚えている。それは単なる恐れ的情感ではなかった。虫を怖がる彼の姿とはまるで違った。両親が性交している場を目撃してしまった冷ややかさ、始めて包丁を持った時の死が身近にいる感覚を、足して二で割ろうとしても割り切れずに不釣り合いな割合でいびつな塊として吐き出されてしまったような姿だった。その姿を見て以来、俺は七助の前で戦

争の話を露骨に避けるようになった。

もはや戦争は無視することができないほど、近寄ってきていた。七助の限界も近いだろうと訝しんでいた頃、俺の弟は戦場へ行った。

そのようにしてずるずると日常を引っ張っていても、戦争は終わらなかつた。恐らく七助の目論見はここにあった。無視をしている間に戦争が終わることを願っていたのだろうが、それは徒労に終わった。召集令状が七助の家にも届いた。七助の母親はさめざめと泣きながら、七助の縁談を進めていた。噂によると七助の縁談はうまくいった試しがなく、初めて上手く話がまとまりつつある縁談に喜んでいたらしい。しかしすぐに出兵しなければならぬ上に、相手方の都合もあるのですぐには結婚はできないそうだ。

俺は淡々と語っているが悲しんでいないわけではない。俺も七助を不憫に思っていた。親の和菓子屋を継ぐと考えている七助が、人を殺す光景は想像することができなかった。きつと饅頭をせつせと作っている方が性に合っているだろう。七助が出兵する日が近づいてつれてそのようなことを考えていた。まるで七助の無口が移ったように、俺も無口になっていった。二人の沈黙の時間が増えた。俺はその時間内に、七助の手のことを考えた。きつとあんこの匂いがあるであろうその手を、数ヶ月後には血で濡らし、腐った人間の匂いをつけて戻ってくるのだろうか、他人事のように憶測ばかりの想像をした。

二

俺は縁談の相手とは七助の出征前に会った。七助が、控えめにめかしこんだ女性と彼女の父親らしき男性と共に家から出てくるところに、偶然遭遇した。俺と目があった七助は、彼女に耳打ちをした。その女性は俺に軽く会釈をした。俺もそれを返した。それっきりだった。二人とすれ違った後に、振り返って後ろ姿を見た。七助の姿には、なんら変わった点はなかった。女性は澄ました横顔をしていた。

出征の前夜は七助の家で祝賀会をした。俺の父が飲んで騒いでいる間に、俺と七助は縁側で酒を飲んでいた。十九歳の晩酌ほど、心地よい背徳感は無いだらうと考えた。

「縁談は上手くいってるのか」俺はふと尋ねた。常日頃から穏やかな性分だった七助は、その時も相変わらず静かだったが、とりわけ笑顔が印象に残っていた。その日の笑顔は確かに何か壊れていた。一体何が七助の笑顔を壊してしまったのか、想像するにたやすいことではあったが、その崩壊はいつから始まったのか、さっぱり見当もつかなかった。俺は壊れ始めた七助の胸中などに構うことなく、のうのうと話しかけた。

「大丈夫だよ。多分、帰ってきたら結婚することになるだろうね」

「帰ってくる事ができれば、な」

「帰ってこれるかな」俺は遠くを見つめて、その言葉に答えようとしなかった。

「僕が死んだらあの子を貰ってよ、そうしないと可哀想だ」七助は笑顔を消さずに、悲しい表情をみせた。俺はその言葉に少なからず憤りに近い感情を抱いた。

「酷い奴」七助は月光に映えた。

七助は結婚せずに家を出た。話し相手がいなくなっても、俺は七助の家の水羊羹を買って、一人で川を眺めていた。

三

七助が消えたすぐ後に、弟が骨になって帰ってきた。惜しい奴がいなくなったものだ、あいつはいい奴だったのに、と感慨に浸りながら、弟の写真を眺めながら、声を忍ばせて泣く母の横で食べた水羊羹の味を、今でも覚えている。その時も、相変わらず水羊羹は不味かった。俺の弟は幼い頃から脆弱で、あまり外に出なかったのでやせ細り、色白だった。もちろん骨よりは白くなかった。遺骨の入った箱を抱いて母は泣いていたが、俺はその箱に触れる気すら起きなかった。その骨が本当に弟なのか、知れたものではないからだ。そのような無粋なことは決して誰にも言わなかった。

次に家族の中から戦場に行く人がいるとすれば俺だった。それは家族の共通認識だったが、誰も口に出すことはしなかった。俺も何も知らないふりをした。七助のように、無視をしていたのだった。

四

生活は変わって行った。七助の母は和菓子屋をたたまざるをえなくなり、俺は川へ行くこともなくなった。とにかく働き、夜は痩せ始めた腹を抱えて、泥のように眠った。浮き出てる肋骨の輪郭に触れながら、弟の骨もこんな触感だったんだろうかと、訝しんだ。俺の思考自体も少し変わった点がある。善悪の境目を区別できなくなっていた。

最初は財布をすられた時だった。俺は金がないことに気がつく、落胆する前に、純粋な興味が湧いた。そして希望すら抱いた。他人の金や食料を盗むことほど、効率的な生き方はないのではないかと思った。幸か不幸か、俺は単純だったのですぐ行動に移そうと思った。自宅に帰ろうとしていた足を神社に向けて、軽い足取りで歩いて行った。

神社では食料を配っていた。その人集りを狙おうとしたのだった。しかしこれが意外と難しかった。皆腹が減って気が立っているのか、少し近づいただけで疑わしげな視線を投げかけてきた。何度かして俺は諦めて神社の縁に腰掛けた。俺も腹が減っていた。俺の財布を盗

んだこの誰かも知らぬ輩に敬意を抱いた。腹が減っている人間より、今の俺のように注意
力もなく、疲弊しきっている人間の方が狙いやすいのだと、盗人の手の内が少しわかった気
がした。そのまま仰向けになると、寺の中に転がっている二人の子供の死体が視界に入った
ので、すぐに起き上がって場所を変えた。

神社をふらふらと歩き回ってみても、誰も祈る者も居らず、賽銭を投げる者もいなかった。
人は皆食事をするために、最低限度の生活をするためにこの神社の秩序を破壊して集まっ
ているのだと思うと、確かに戦争は疎ましいものだと改めて感じた。誰にも見向きもされな
い本殿を哀れに思って、俺はそちらへえっちらおっちら歩いて行った。

一人、本殿の前で拜んでいる女性がいた。今の世の中も捨てたもんじゃないと、感心しな
がら近寄ってみると、その人は七助の嫁（になる予定の人）だった。俺は彼女に気にせず
に賽銭を投げようとしたが財布をすられたことを思い出して、仕方なく小石を適当に拾い投
げて賽銭箱に入れた。手を合わせてじっと目を瞑っても、何を祈ればいいのかわからなかつ
たので、とりあえず死んだ弟のことを考えた。

目を開けて振り返ると女性と目が合った。彼女が口を開く前に俺から質問をした。先に質
問をしたことに関して、俺は不思議と優越感を覚えた。

「何を祈っていたんですか？」警戒されると思いきや、相手は造作もなく応えた。

「先日、祖母が亡くなったんです」七助の無事を願っていたのだったら健気だと妄想してい
たが、見事に外れた。しかし七助も彼女と数回しか顔を合わせていないだろうから、当然と
いえば当然だ、と軽い落胆を打ち消した。

「ここで何をしていたんですか？」投げられた質問にいくつかの違和感を抱いた。

「泥棒をしようとしていました」すると彼女は意外にも驚いた素振りを見せずに、丁寧に風
呂敷で包み込んで俺に贈るように、返した。

「変な人ですね」

「変ですか？」と自分で聞き返しておきながらも、変であることを薄々自覚し始めた。

「変ですね」彼女の口調は特異だった。短い言葉の一つ一つに、流麗な装飾を施しているか
のような美しさが含まれていた。彼女は名前を三ツ枝と叫んだ。

「別に俺は怪しいやつじゃありませんよ、全部この暑さが悪いんです。これだけ暑けり
ゃあ、そら誰だって変になりますわ。ほら、あの小さな子の持つてるキュウリだって、暑さ
に耐えられずに、ひん曲がり始めてる」

「キュウリが曲がると、あなたの性格も曲がるんですか？」抑揚をつけずに、しかし異様な

魅力だけ残した声で三ツ枝が尋ねた。俺はその質問に微かに笑った。

「例え俺じゃなくても泥棒をしたくなる日和ですからね、今からまた何処かへ行きましようか？」

「また盗みに行くのですか？」三ツ枝は僅かに表情を、綻ばし始めた。それが俺の言葉に対するものなのか、俺の微笑に対するものなのか、それとも暑さのせいなのか、不思議と気になってしまった。

「ヤ、涼みに行くだけです」調子に乗り始めた俺は、三ツ枝の手を取って歩き始めた。骨を感じられるほど、三ツ枝の手は痩せ細っていた。しかしそれは珍しいことではない。

五

神社のすぐ横には火葬場があった。周囲に人気は無く、閉ざされた門の前で二人並んで佇んだ。

「閉まっています」

「今日は友引ですから。それにして俺はついていきますね。こういう日に限って、俺は行動をしたがる。いや、違うな……。それは生まれつきのこと、あたかも人生の中に散り散りになって潜んでいる運という運がひとつ残らず、俺の前で平伏して、俺の道を作ってくれているのではないかと錯覚せざるを得ないぐらい、俺は何事に対してもついてくるんです。俺がついている日に行動するのではなく、俺が行動する日は全てついて……。そんなことを最近、気づき始めました。とにかく、何が言いたいのかというと、今日が友引で良かった。再び感情が欠落したような表情になった三ツ枝は、状況を飲み込めていない様子だった。やはり感情の起伏がおかしくなり始めている俺は、そんなことを無視して、その調子を続けた。

「閉じている方がついてるんですか？」

「そうです。閉まっている方が、都合だ。思い立ったが吉日とはまさにこういう事なんだろうな」と言って再び彼女の手を引いて少し歩いた。垣根の抜け穴の前で止まり、芝居じみた安っぽい仕草で指し示した。

火葬場の中は薄暗く、埃が舞っていた。

「何をするんですか？」

「雨を降らせて皆を助けてやるんです」隅にあった蛇口を少し捻ると、生ぬるい水が出てきた。脇に置いてあった長いチューブを蛇口に付けた。チューブのもう一方の端を持って、穴の前に立った。

「それでは、一度、俺は死にますね」と三ツ枝に言って、穴の扉を開けて、中に入った。自分でも驚くような速さで煙突をよじ登り、煙突のてっぺんにチューブをくくりつけた。そして再び猿のような速さで下に降りた。穴ぐらから出ると、きちんとした格好で三ツ枝は待っていた。ススだらけの格好になった俺は、再び壊れた笑みを顔に貼り付けた。

「生き返って戻って来ました。さあ、上に行きましょう、その階段を登ってください」三ツ枝に階段を上がるよう仕向けながら、蛇口を思いっきり捻った。水が出始めたのを確認して、俺も階段を登った。二階の用務員室を素通りして、三階の待合室まで行った。

奥の和室に三ツ枝はいた。俺は障子をばっと開けて外を見た。

「ほらごらん、雨が降り始めました」煙突の上からはみ出たチューブを指差して言った。チューブは狂ったように暴れまわりながら、あちらこちらにもすごい勢いで水を撒き散らしていた。ちょうど神社の方に水がかかるたびに、人々の悲鳴が聞こえた。

「いつもやっているんですか？」意外にも乗り気な様子を見せている三ツ枝が尋ねた。

「駄目だね、君はさっきから質問ばかりだ。気にしないでいいことは忘れない」と言っていて俺は窓から身を乗り出し、屋根伝いに煙突まで堂々と歩いて行った。ひよいとチューブを手に取り、方々に水をばらまいた。子供達が明るい声で叫びながら、はしゃいでいるのを見て凶に乗り、しばらく続けていたら、怒号が聞こえた。初老の男がこちらを指差しながら顔を真っ赤にしていた。なんとなく癪に思ったので、男の頭頂部の髪が薄くなっているところに目掛けて水をかけて、そのまま三ツ枝の方へ戻って行った。

「もういいや、逃げましょう」戸惑う三ツ枝の手を掴んで、階段を駆け下りた。きちんと蛇口を締め、チューブはそのままに、火葬場を後にした。表の通りに出るやいなや、先ほどの男がいかつい連中を引き連れてやって来たので、そのまま走って逃げた。

六

川のほとりに着くと、歩調を緩めた。雑草の生い茂ったところへ思いつきり倒れると、一緒に三ツ枝も倒れた。顔を見合わせると同時に二人とも壊れたように笑った。急に七助のことを思い出し、息苦しくなった。三ツ枝が笑っている横で、俺は笑いながら泣き始めた。何故か腹の底から笑えた。荒廃して行く我が身に想いを馳せた。何処かで死に寄っているであろう七助と比べると、自分が惨めに思えて来て、ますます泣けてきたが、それ以上に良く笑った。

しばらくして笑い疲れると、二人で黙って川の音を聞きながら、木漏れ日を淡々と眺め始めた。

「七助は戻って来ると思えますか」俺が宙に向かって言った。

「どうでしょう？それにあの人が帰ろうが帰るまいが、私の生活にはなんら変化はありません。それから私はただ父の言葉に従うのみですから」さっきまで笑ってたはずなのに、嫌に冷たい返事が帰ってきた。

「俺は七助に言ったんですよ。お前が帰って来なかったら許嫁をもらってやる、ってさ。そうしたらあいつ頷いて、そうしてくれって言ったんです。ひどい奴でしょ？」むきになって、俺は下手な嘘をついた。

「意外ですね」さらりと三ツ枝に返された。

「何が意外なんですか？」

「見かけによらず強かな人かと思っていたのに、私の想像以上にかわいそうな人だわ」視界の隅の木に止まっていた一匹の蝉が鳴き止んだ。しかし音が絶えることは無い。

「これからどうするんですか？」三ツ枝に言われた。

「残念ながら待つしかないですね。七助が帰って来るまで、退屈な人生をやり過ぎて待つことにします。俺は生きる目的もないつまらない人間ですから、そうするしかないですね。

三ツ枝さんも、それからをひたすら待つて過ごすんでしょう？」

「どういう意味ですか？理解しかねますね」

「三ツ枝さんは父親の言葉を待っている。三ツ枝さんのそれからと俺のこれからは何ら異なることのない、全く同じものです」空白の時間が生まれた。それは数時間のものに思えたが、実際は数秒にも満たない。俺の言葉と、その後に発される三ツ枝の言葉との間には果てしない空白が存在していたが、それと同時に、二つの言葉は確かに微かな糸を引いていたはずだった。俺はそれを決死の思いで手繰り寄せる事で、空白を途切れさせ、言葉を結びつけ、会話を形成することができた。それぐらいの質量を、その空白は孕んでいた。

「……酷い人ね」再び蝉は鳴き出した。もしかすると蝉も三ツ枝の言葉を待っていたのかもしれない。なんだか七助のような発想だ。俺は知らないうちに七助に寄っているのかもしれない。そう考えて再び笑った。今度は少しだけ笑った。つられて三ツ枝も笑った。三ツ枝の笑い声は稲穂が風に揺れる時のように心地良いものだった。

日が暮れる頃に二人で帰路に着いた。足取りは疲労で重かったが、苦しいものではなかった。急いでいるわけでもないのに、追いかけて回されているわけでもないのに、俺はまた三ツ枝の手を取っていた。夕日は美しかった。このように毎日太陽が壊れていくんだとキザなことを言ったら、三ツ枝に見向きもされなかった。

それからくたびれた夏を何度か三ツ枝と共に過ごしたが、七助は一向に帰って来なかった。戦争が終わったら皆帰って来るだろう、と高を括っていたが、骨一つ戻って来ることはなかった。俺は七助の不在に難色を見せずに、あくまで平常心を保っていた。それはある意味ではとても不思議だった。七助にとっても会いたくなかった時もあったが、いつの間にか、俺はその焦燥に耐えられるようになっていた。いつの間にか、と言わざるを得ないほど、いつからそうなってしまったのか俺にはわからなかった。七助がいないことに対して何ら感情は抱かなかったが、その無情に対して哀愁を抱くことはあった。残念なことに七助がいなくても、俺は何もない日常を過ごすことができるとわかってしまった。

戦争が終わって数年した後、俺は食堂を開いて働き始めたが、それからは恐ろしい早さで時間が過ぎた。二十代があっけなく終わりを迎えようとしていた頃には、共に河原へ行く相手はいなくなっていた。

その夏は雨がよく降り、涼しい日が多かったことを覚えている。天気の良い日が極端に少なかったので、晴れると一人で河原へ出かけた。道中、和菓子を買った。

前日に雨が降っていたからか、地面は重かった。河原には誰かがいるはずもなかった。俺と七助と、三ツ枝以外の人間がそこにいる光景を見たことがなかった。しかしその日は俺のその固定観念が崩れ去った……かのように思われた。見知らぬ人物がそこに居た。

薄汚い衣服を着た男が、手頃な岩に腰掛けて自らの腕に注射をしていた。俺は一瞬硬直し、すぐに音を殺して男へ近づいて行った。

一見、変哲もない薬物中毒者のように見えた。実際、中毒者はそこら中にいたので、今更驚くこともなく、その場で無視することもできた。が、無視することができなかった。何故なら、俺は何事に対してもついているからだ。それは幸運だけでなく、その逆においても言えることだった。運の良いことに、俺は破滅的な意味においてもついているからだ。

俺はしばらくその男を静かに観察した。男は煙草を吸い始めた。動揺はしていなかったが、頭の片隅にある可能性を払拭しきれずにいた。男は俺に全く気づかなかった。まくられた長袖の下に、痛々しいほど赤黒く日に焼けた皮膚が見えた。無精髭が放置された庭のように不恰好に生え、右手の指が数本欠けていた。男の横顔を視て、その後、眼を視た。薬を摂っていたからか、眼差しは異常なほどに溶解していた。しかし見覚えのある眼だった。

その男が七助だと確信した時、俺はその場で彼を殺そうと思った。七助はひどく痩せ細っ

ていた。彼の泥だらけの細い首に手をかければ、たやすく締めることができそうだった。眼を鋭く尖らせて、息を殺し、足音も殺し、後ろから七助に近づいて行った。自分でも恐ろしくなるほど頭は冴え、落ち着いていた。その時、俺は間違いなく正常だった。

タバコの煙が鼻腔をついた瞬間、緊張が吹っ切れて、俺は正常から異常へと戻っていった。立ち止まり軽く眼を伏せて、浅く息を吸い呼吸を整えた。蝉の声を数えて落ち着こうとしたが、何度も数え直す羽目になった。

さすがに気配に気づいたのか、七助はゆっくりとこちらに顔を向けた。互いの視線を蛇のように音を立てずに交わらせた。

九

「……靖」自分の名前を呼ばれたことに気付くのに一瞬の時間を有した。少なからず自分が動揺していることだけ、理解できた。何故俺がこれほどまでに動揺しているのか、さっぱり検討もつかなかった。そして何よりも、俺より七助の方が落ち着いている様子であるのが気に食わなかった。

「久しぶりだね。何年ぶりだろう」七助が続けて言った。彼の声はくたびれていた。

「わからない」たった一言だけ、俺がそう言うと、七助は微かに笑った。その笑顔を見て、俺は安心した。七助はまだ、壊れていた。その笑顔が証拠となっていた。七助の笑顔を境に、俺は徐々に冷静を取り戻していった。

「……さっき、自分の家に行ったらさ、知らない人が住んでたんだ。……僕の母さんと父さんの行方を知らない？」

「おじさんは空襲で焼け死んだよ。お婆さんはちょうど一、二年前に病気で死んでしまった。今はもう、あの家はお前の家ではない」さっと手を引くように、七助の目から光が消えた。

「そう……それは……」七助は俺の視線を外して言葉を探した。着地点を探すように沈黙を泳がせて、最終的に、

「残念だ」その一言に至った。

「……頼れる親戚は近くにいないのか？金はないだろ？」

「……松山、に、叔母がいる……。もちろん、死んでるかもしれないけどね……」

「それじゃあ、その人に手紙を送れ。しばらくは俺の家に泊まればいい。落ち着いたら貸家を探そう」一言ずつ口を含むように言って、七助を落ち着かせようとしたが、配慮をする心配もいらぬ様子だった。七助は両親の死に対して、恐ろしいほどに落ち着いていた。全て

の物事を諦観しているようだった。

「うん……ありがとう」

「行こう。一人で立てるか？」

「……大丈夫、立てる」錆びた機械のようにぎこちない動きで七助は立った。

「靖は背が伸びたね……。僕たちは、あつという間に、大人だ」

「……」その点に関しては肯定できなかった。七助の隣で歩く俺の中に、冷たく汚れた生き物が蠢くような感覚に襲われた。

思えばこのようにして二人で帰路を歩くのも久しぶりだった。かといって俺は童心に戻ったりはしなかった。返るべき過去の童心を、その時俺は持ち合わせていなかったからだ。きつと七助もいつの間にか壊してしまい、その残骸をどこかに捨ててしまっている。

「最後に甘いものを食べたのはいつだったっけなあ。思い出せないや」

「……戦争が終わった後は何してたんだ？」

「特に大したことはやってなかったよ。少しの間、捕まっていただけだよ」七助と話していると、奇妙な感覚に包まれた。七助の視界に未来など存在しないはずなのに、七助は当たり前のように呼吸をし、心臓を動かし、俺の隣で生きている。死にかけているのにかろうじて生きている人間を見るのは初めてではないが、俺が見てきたそういう人間は皆すぐに死んだ。

「この数年の間にたくさんの人に触れてきたよ。僕と年の近い男、小さな幼い女の子、シワだらけの年寄り、農家、漁師、主婦……。同じ人は二人としていなかった。全員に共通していたことは、彼らには彼ら個人の生活が存在していたことと、僕が彼らに触れた時にはもう既に冷たくなってたことぐらいだった。僕は人間に対して、それぐらいの共通点しか見出せなかった」何も尋ねていないのに、七助は喋り始め、俺は黙って七助の言葉を聞いていた。先ほどの様子とは異なり、七助はいささか饒舌になっていた。

「僕自身の手で殺した人はできるだけ、触れるようにしたんだ。死体に触れたところで、別に何かが変わるわけじゃないけど、それをやらないと何か壊れてしまう気がする、必死で手や、顔なんかを触って、とにかく温度を探したんだけど、結局見つからなかった」

「当たり前だろう。自分を殺した奴を、温かく迎えて抱擁したがる人間がいるはずがない」

「学んだことも多かったよ。人の殺し方と煙草の吸い方は親に教わらなくても、身に付けることができる」七助が笑うと、ヤニで黄ばんだ歯が見えた。

十

森を抜けると、二人揃って夕日に目を細めた。

「本音を言えば、俺は何も後悔していない。罪悪感もこれっぽっちもない。だから俺は平然とこうやってお前の隣を歩ける」今度は七助が黙る番だった。

「夕日を見るたびにお前を思い出していたよ。ただ、夕日と違ってお前は帰ってこなかったけどな。俺は時間が経つにつれて、新しいものが生まれてくると思ってただけど、結局俺は何も変わらなかった。最悪の場合、ずっと子供の時から何一つ変わっていないのかもしれない。残念だ。いつの間にか、死人に年齢を抜かされた気分だ」七助の気持ちだが、少しわかった気がした。何かが変わるわけではないが、俺は今、七助に肩を貸し、触れ続けていなければいけないという、子供の意固地に似た使命感を抱いた。

「勿論、それがありえないことだってことはわかってるさ。言葉のあやさ。」七助は俺が何について話しているのか、理解していないようだった。それも当然のはずだった。俺は、七助に今すぐ理解してもらおうと望んでいなかった。

「もし俺が後悔することがあるとすれば、過去のことでなく、現在の俺を恨むはずだ。つまり、俺とお前が再会したことを後悔するだろうな。それ以外の一切の過去に後悔を抱くことは無い自信がある」七助は再び落ち着きを取り戻していた。二人の頬が夕陽で染まっているうちに家についた。

十一

七助はこれから先、何があっても動じることは無いだろう。戦争が彼にもたらした影響は予想以上に大きかった。その証拠に、彼は両親の死を知っても涙を流さなかった。彼にとつて衝撃的なことがこれから起きようと、きつと易々と受け流すことができるだろう。いや、無意識のうちに受け流してしまうのだ。無視をすることができるのだろう。とはいうものの、七助が強くなったわけではない、というのが俺の現在の見解だった。七助の表向きの強かさは全て諦観によるものだろう。全て俺の予想に過ぎないが、おそらく間違っていない。

食堂は定休日だったが、七助を適当に座らせて、麦茶を出した。億劫だったので、照明は一つしか点けなかった。俺は七助の向かい側に座った。

「湯船に浸かるか？」

「いいよ、近所の銭湯に行く」七助は貪るように麦茶を飲み干した。奥の階段から、足音が聞こえた。俺は無意識のうちに両手を机の下で力ませた。

「妻が一階に降りてきたみたいだ」七助が足音の鳴る方へ視線を向けた。俺は七助の視線の一挙一動を観察していた。

暖簾をくぐって出てきた三ツ枝と七助の眼差しが会った。今まで感じたものの中で一番

重い沈黙があった。

「……お久しぶりです」俺の予想通り、七助に動揺の表情はなかった。

「……お勤めご苦労様です。……帰っていらしたんですね」七助につきつきりで、三ツ枝の表情を見ることはできなかった。声を聞く限り、少なからず動揺はしているようだったが、後ろめたさはなさそうだった。三ツ枝は俺の隣の席に座った。

「……お子さんですか……？」七助は三ツ枝の腹に目をやって訊いた。

「はい。もうじき産まれるんです」愛情に満ち満ちた声だった。

「そうですか、元気に産まれてくると良いですね」感情はこもっていたものの、乾いた声だった。

「……良かったです。二人とも、元気そうで……」

「七助さんも、よく生きて帰ってこられましたね」

「しばらく七助を家に泊めてもいいか」俺はというともろく崩れ去りそうだった。それを必死に耐えた。

「はい、私は構いません。いくつか空いてる部屋がありますから」

「街並みもだいぶ変わってしまいましたね。ここまでの道中、まるで見違えたかのようにでした」

「ええ、ここもいろいろありましたから……」訥々と七助と三ツ枝は言葉を交わした。俺は疎外感をゆうに超えて、孤独を感じていた。二人が後ろ姿すら見えないほど先を歩いているようで、未恐ろしくなった。

「靖は、何事もなかった？ここら辺もかなり焼けたんでしょう？」唐突に話しかけられて、俺は初対面の人間に対する視線を七助に向けていた。

「……ああ、大丈夫だよ、心配ないさ」

「そう……それは良かった」俺は無言で、七助の空いた湯飲みに麦茶を注いだ。ありがとう、と七助は呟いた。その一言で、俺は壊れたかのように思えた。実際、何らかのたがが外れたに違いない。しかし変化を外に出したりはしなかった。俺は太陽のように平然とした表情で、緩やかに崩壊していった。

十二

貸家は意外と簡単に見つかった。大家のおばさんに話をつけて、七助は俺の家の近くで暮らす事になったが、俺はなるべく毎日顔を出すようにしていた。というのも、夜な夜な呻き声が聞こえてくる、部屋の中で暴れまわっている、足音が聞こえる、などと大家が俺に報告

をしてきたので、心配になったからだだった。昼間に見る七助は、何も変わりのない姿をしていた。部屋には麻葉の匂いが充満していた。

数日経つと、七助は木工所で働くようになった。着々と社会復帰をしていったが、相変わらず七助は薬と煙草に依存していた。しかし俺は少し安心していた。このまま何事もなく終わってしまったら、それより素晴らしいことはないと言信していた。ところが現実はそのほど上手く進んでくれはしなかった。俺がついているのと同じくらい、七助はついていない人間だった。

十三

「何かあったんですか？」縁側で酒を飲んでいると、三ツ枝が質問してきた。

「……何故、何かあったと思った？」

「最近、悩み詰めた顔をしていることが、多くなったからです」寝室の扉を閉め、二人で縁側へ向かった。

「少し思うことはあるけれど、別に大したことじゃあない」という俺の回答を三ツ枝は無視した。

「何かあったんですか？七助さんが帰ってきた後に」簡単な話、三ツ枝は感じていたのだ。吐息を漏らして、麦茶を一口飲んだ。

「あいつ、親が死んだことを知っても泣かなかつたんだ。なんであいつはあんなに大人になってしまったんだろうなあ……あいつがここ数年で得られるものなんて無いはずだろ……なのにあいつは変わって帰ってきた。子供ができたからといって、誰もが大人になれるわけじゃあ無い。あいつが人殺しをしていた時に、俺が何をしていたのか、わからなくなったんだ」三ツ枝もため息を漏らして、麦茶を飲んだ。

「泣かない人が大人だと思っていたら、大間違いですよ」凶らずも、二人で麦茶を一気に飲み干すタイミングが被った。

「きつとあなたは後悔することも多いのでしようが、そんなことをする必要はありません。時間を浪費するだけです。後悔する必要なんてありません」

「そんなことはない」俺は後悔をしていないと言いたかったが、唐突に自信を無くして、それ以上は何も言わなかった。

庭の隅で蝉が死んでいた。夏が終わろうとしている。

十四

最初は風邪のようだった。久しぶりに仕事を休み（七助は真面目だったので、仕事はさぼ

ったりせずにこなししていた)、寝込んでいた七助はひどく咳き込んでいた。俺が見舞いに行つたとき、七助は咯血した。俺は不意に七介の母親を想起した。彼女も結核で血を吐いていた。俺は七助を病院へ連れていったが、不安の中、結核だった。はは、仕方ないよ、でもなんだか嬉しいな、親子、お揃いだ、と七助は笑った。俺は七助を殴った。それでもなお、七助は顔に笑みを貼り付けたままだった。

七助は入院を頑なに嫌がった。ボロくさい、薬物臭い小さな部屋を死に場所として望んでいた。俺も三ツ枝も無理に入院させることなく、七助の望みを優先させた。

依然として七助は中毒者の発作を起こした。それと同時に、病気によって衰弱していった。飛ぶような早さで、七助は荒廃していった。結核のために入院させるのではなく、薬をやめさせた方がいいのではないかと考えていた頃に、薬も金も底をついたようだった。

十五

ある日、七助の部屋に行くと、衣服やら何やらが部屋中に散乱していた。ひとしきり暴れ終えたところらしく、七助は背中を壁に任せ、両足を床に放り出し、汗まみれになって疲弊し切っていた。俺は入り口で立ち止まり、じっと七助と見つめあった。

「心配することはない。ただ同じだけさ。そう……蝉みたいなものだなきつと」七助の視線は異様にはつきりとしていた。

「蝉と一緒に、死ぬだけさ。きつと僕はこの夏を越えられない。仕方のないや。……ところで、靖、タバコ持ってないかい？」タバコもなくなったらしい。

「俺は吸わないから無いな」

「ああ、そうか、そりゃあ……残念だ」七助は手の届く場所にあった、灰皿を漁った。

「ねえ、覚えてる……？僕、水羊羹が好きだったんだ……。父さんの作った、中のあることがすくて見えるやつさ……。戦争から帰ったら食べようって、ずっとそのことだけ考えて、必死に人を殺してきたのにさ……。ああ、くそ、暑いな……。タバコにのめり込んで、薬に浸かって、気づいたら、もう夏も終わりだ。がっかりだ。昔はもっと、夏休みの使い方も、上手かったのにな……。宿題は毎日やって……靖と毎日遊んで……川によく行った……。なあ、なんでこんなにあつという間に終わるんだ？僕はいつ怠けたんだ？ずっと働いたのに、もうじき夏は終わる……。あともう少しさ……。もう少し我慢すれば、それで終わりさ……。つまらない夏休みだ……。花火の一つも見れやしない。ただ家に幽閉されて……。あとは待つだけだ……。つまらない一日だから……。ねえ、覚えてないか……？僕らが子供の時は、一日がもっと楽しかったんだぜ……」

「悪いけど、覚えてないな……気にしなくていいことは忘れるようにしてるんだ」七助の前にスイカを置いた。

「そう……。それは辛いな……。僕は死ぬまで、退屈な人生をやり過ごして待たないといけないのか……」しばらく二人で黙り込んだ後、やりきれなくなつて口を開いた。

「俺はずつと後悔してるよ……。お前と再会した時に、お前を殺しておけばよかったんだ……。なぜあの時、やれなかったんだろう……。俺はきつと、一生涯悔やむに違いない……。後悔する必要はないなんて嘘だ……。今、あの場にいたらだ、俺はお前を殺せるのにな……。とても残念だよ……。俺は、今あの瞬間だけをこれからずつと後悔することになるだろうな……。」腹の底から思つてることが漏れ始めたが、それと同時に不思議と笑いが込み上げてきた。

「なあ……。教えてくれないか……。？お前、人殺しをしていた間、何をしていたんだ？俺はそれが不思議でたまらないよ……。お前はどうかやって、大人になつたんだ……。？俺はいつまでも大人になれずにいるからさ、わからないんだ……。教えてくれよ……。人を殺せば大人になるのか？お前は何をしてきたんだ……。？それを知らない、死んでも死にきれない……。不味い菓子の話なんてどうでもいいんだ……。俺はお前のことを知りたいんだ……。なんでお前は泣かないんだ……。？なんでお前は俺に許嫁を取られたのに、何も言わないんだ……。？なんでお前は、そうやって平然と退屈にけちをつけながら、死を待ってられるんだ……。？」七助は相変わらず、全てを諦めたような顔をしていた。

「……。僕の手は血まみれだし、指数本なくなつてるし、虫に食われているけれど、もう治せないんだ……。昔は汚れることが嫌いだった。砂埃さえも嫌いだったけど、いまはそういう問題じゃないんだ……。血は落ちないんだ……。切り落とされた指は戻つてこないし、手は虫が沸いている……。もう、僕の汚れは落ちることはないんだ……。」もちろん、七助の手には虫一匹いなかった。

「そんなこと、もう、諦めるしかないじゃないか……。ねえ……。靖、扉を閉めてくれないか……。？怖い、おぼけがこつちを見てるんだ……」

「壊れている人間は違うな……。俺とは見る世界すら違うつてことだ……。」俺が立ち上がった、部屋を出ようとする、七助は背中越しに声をかけてきた。

「違う……。それは絶対に違う……。教えてあげるよ、信じればいいだけなんだ……。子供のように架空のものを信じろとは言わない……。ただ、靖は全てを疑いすぎているんだ……。それだけは絶対に正しい……。当たり前のことを、それと自分を、受け入れて、信じればい

いんだ……。そうすれば、きっと変わる……。世界がほんの少し、変わるさ……。そうすれば、きっと見える……。七助を真顔で見つめた。

「……怖い怪物が、そこに立ってるのが」七助は片方の口角を上げて、俺に歪んだ笑顔を向けた。泣いているのを気づかれなくなかったから、俺は背を向けた。怪物はどこにもいなかった。

十六

七助が死んだ後に、弟の遺骨に初めて触れた。俺はそれが弟のものではないと疑っていた。しかしそれが弟ではないという確証はない（もちろん、弟であるという確証もないが……）。随分と前に死んだ弟を信じることにした。すべすべした部分から溝まで、丁寧に時間をかけて触れた。触れずにはいられなかった。しかし俺が変わったことで、世界が変わることとはなかった。

七助の火葬が終わった後に、遺灰を俺が受け取った。三ツ枝と一緒に、火葬場の三階から灰を蒔いた。それはとても美しい光景だった。雪にも似つかぬ灰が、宙を舞って、何処か見えないところまで、風に乗って飛んで行った。しかし同じ場所から雨を降らせた時とは違って、誰も怒る人はいなかった。というより、俺が灰を降らせていることに誰も気がつかなかった。七助が変わったことで、世界が変わることとはなかった。

帰り道、三ツ枝と一緒に水羊羹を買って川原へ行った。結局、俺が水羊羹を好きになることはなかった。俺は川に水羊羹を一つ投げた。すぐに水羊羹は川に透過していった。

ふと思り返してみると、七助と言い争った日を境に、俺は泣かなくなった。世界は何一つ変わっていないのに、いつの間にか俺は泣かなくなっていた。